

映畫やテレビの時代劇には敕使なるものしばしば登場す。現代社會に於てはお目に掛かること少なけれど、吾實際に迎へたるは、父の葬式の折なりき。半世紀前、父は公職を退きし後、七十歳を前に肺癌に侵され、この世をさりぬ。父は生前毎日六十本におよぶ英國製ダンヒルの煙草を何年にも互り吸ひて、「我は肺癌にて死ぬべし」と常々言ひ放ちつ。

その當時本人に對する癌告知は稀なり。擔當醫師は半年の餘命と、長女なる吾に告知す。落ち著きゐたるつもりは、歸路愛車にて正面衝突の事故起し、自らの動搖思ひ知れり。吾より更に衝撃を受くべき母には如何に告知せむや、悩みたるを、母はもともと氣丈にて、思ふより靜かに受け止め、看病に徹す。

我家は父方も母方もカトリック教徒にて、葬儀は四谷のイグナチオ教會にて執り行はれたり。退官して間もなきこともあり、教會には見送りの弔問客引きも切らず、外にも並ぶほどにて、人の集まるを好める父の歸天にふさはしと思ひけり。

葬儀には様々なる事起こるは、人氣を博せし故伊丹十三監督の制作の映畫、「葬式」記憶に新し。ひとつは葬儀屋の手違ひにて、記名受附用に金額記帳簿を並べ、多くの弔問客を困惑せしむ。通夜のあとに判明し、喪主側大いに恥ぢ入りたり。

看病に疲れ果てし喪主の母に代はり、吾は長女として、挨拶等に追はれぬ。葬儀始まりて間もなく、手傳ひの友息せき切りて近づき、「チョクシ」弔問に訪れしも、坐る場所なければ、鈴木東京都知事と朝日新聞社社長の間に席を設くるが、それで良きかとの問ひ。吾は、チョクシの何たるやも分ならず「チョクシ何？」と聞き返しつ。友は天皇陛下の敕使「旭日重光章」なる勳章御持參の由と返答。陛下の敕使とは大變と家族一同仰天し、慌てふためき、それ以外の方法なくとて、計らひ宜しくと依頼せり。されど、家族は誰も敕使御差遣のことは聞きてをらず、後に吾ら當日の慌てふり、葬儀にかかはりし友人たちの間にて、失笑を誘ひき。

父は幼き頃、長崎の大浦天主堂にて、ミサのアルターボーイを一年ばかり務めたる経験あり。これが爲か、アベリアの讚美歌を好むこと大なりき。これによりて、我が家族、父を送るにこの歌を以てせんと欲し、ドイツの音樂學校に留學したるの経験ある知己に三種のアベリアを歌ふこと依頼せり。葬儀の參列者の方々、これを聞きて、涙催さずんばあらずと口々に仰せられけり。